

巻頭言 「小さな幸せ」

宇野 元

『ギレアド』には、印象深い場面がたくさんあります。読者それぞれの心に残る箇所があることでしょう。私が思い浮かべる場面の中に、こんな一コマがあります。

子どものとき、こんな夢を見た。今も目に浮かぶ。おふくろがぼくの寝室に入ってきて、隅の椅子に腰をおろし、膝の上で両手を組んでいる。そうしてじっとしている。おだやかに、ひっそりと。ぼくはなんともいえず平安な、幸せな気持ちだった。目がさめると、おふくろがその椅子に腰かけていた。微笑んで、こう言った。「独りで静かにしてたのよ。幸せ。」

子ども部屋で、静かに椅子に腰掛けている母親。寝ていたエイムズを見つめていただろうと思います。

実家にスチール製の棚があり、扉に小さな白黒の写真が貼られています。父と母と私と猫が、現在も使われている食器棚を背景に、正面を向いて座っています。全体の淡い雰囲気時代に隔たりが現れています。スチール製の棚の中には、父が撮ったおびただしい数の写真が収められています。先日、ふと思いました。それらの中から、父は特にあの一枚を選んだのだろうか。

昨年亡くなった父は、妻に先立たれたあと、長く生きました。多くの時を一人で過ごしていた父を思います。スチール棚を前に、幾度となく、静かに佇む時があったでしょう。

この地球の上に、どれほど小さな幸せが与えられていることか、そしてどれだけ繰り返し与えられていることかと思います。小さいけれど、思えば、高価な宝に勝る幸せ。……有限な、また互いに欠けを負い合う私たちですが、それにもかかわらず、愛し、愛される喜びが授けられています。聖書は、父なる神を証ししています。私たちを見つめている目がある。私たちを無条件で喜ぶ心がある。永遠の愛が存在する。私たちは、この愛のなかで平安な心持ちでいればよい者とされています。純粹に愛されている存在として、喜んで生きるよう、招かれています。

「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された」(ヨハネ 3,16)。イエスは、この愛を、故郷を離れてさまよう子の帰還を待ちつづけ、遠くから子を識別して、走り寄る親の姿にたくして語っておられます。